赤羽別院報　第54号
発　行　所
真宗大谷派
赤羽別院　親宣寺
〒444-0427
愛知県西尾市一色町赤羽上郷中14
Tel・FAX（0563）72－2308
Eメール
akabane_betuin@katch.ne.jp

仏様に照らされて

罪福信

阿弥陀様の救いの徳というのは、選ばず嫌わず見捨てずどんな者も救いたいという願いです。しかし私たちは、その願いを聞きながら、そんなうまい話はあるわけない。だから自分達が頑張らなければいけないと、善行功徳の徳を積むのです。善い行いを一生懸命やろうとしているわけです。それは、私の考える善悪です。それによっていいところへ行こうと思っているのです。

善い事を取り入れ、悪いことは切り捨てていく事を罪福信と言います。全ての人を救いたいという阿弥陀様の願いを疑って自分の価値観の中で右往左往しているのが私達の姿ですね。

枠を知らされる

私達にはたらきかける仏様のおはたらきを光で表現しています。『正信偈』でいうと、十二光が出てきますね。その中に無辺光というのがあります。仏様は、どういうはたらきをされるのかというと辺がないのです。辺が無いということは、どこまでも広がっている。仏様の辺が無い光に照らされると、私達には辺があり、枠を作っていると知らされるのです。

私自身は枠の中にいて善悪を分けているのです。私は間違ってもその枠の外に出る事はないのです。常に自分は善い枠の中にいて枠の外の悪を切っているのです。

そのことを思い知らされたのは、約一年前に起きた神奈川県の事件です。障がい者施設に若い元職員が忍び込んで、寝たきりの人だけを選んで次々に殺傷した事件がありました。

あの青年のいう善においては、彼らは生きている価値が無いというのです。自分で自分の事が出来ないのだから生きている事自体が不幸だ。殺してあげる事が解放してあげる事になる。そういう人を家族や身内に抱えると家族が不幸になる。その人がいなくなれば楽になる。これは善い行いだ。こういう人達にお金を使うのは勿体無い。

そういう風に自分のやっている事は善行なのだという意見です。独善ですよね。そしてあの事件を起こしました。日本国中が連日その行為を最悪の事件だと非難し、青年のことを悪だと糾弾しました。

その一方で気になったのは、その施設での事件が日本中で話題になっているにもかかわらず、一週間前に新聞に載ったある記事について一切話題になっていなかったことです。

その新聞に載った記事とは何かと言いますと、出産前検診した方々の記事でした。

だんだん高齢出産等々でリスクが増えてきますと、三十五歳以上という条件つきで出産前検診を受ける方々がおられます。生まれてきた時に子どもがダウン症になるかどうかという検査を行うのです。検査を行った結果、陽性反応がある時、再検査をします。その結果、生まれたらダウン症になるかもしれないと診断されたうちの94％の命が人工中絶という形で命を奪われたという内容です。

年齢的な問題、経済的な問題、今後の人生設計の問題等、悩んで悩んでの結果だと思いますが、生まれてくる前に障がいを持って生まれてくるであろうという宣告の下、94％の命が奪われました。

この事がほとんど話題にも上がらなかったにもかかわらず、障がい者が手にかけられた事件の犯人に対して日本中が糾弾しました。

糾弾する人は、自分がそんな事をするはずが無いと思っているのです。だから、あんな悪い奴と言うのです。でも、本当にそうでしょうか。この事件は、決して他人事ではないのです。

業縁存在

『歎異抄』をいただくと「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」とあります。私達人間は、いつ何をしでかすかわからないのです。縁あれば自分に授かった命ですら奪ってしまう事があるのです。

お参りに伺うお宅で毎年お盆に「水子のお参りをしてください」と言われます。命を授かったのだけれども、生まれる前に流れてしまったんですね。そのお宅では、月命日が13日ですのでお盆には併せて水子のお参りも頼まれます。やっぱり、その悲しみを消えないものとして抱えていくのでしょうね。そういう縁の中、94％の中絶を選ばれた方々も、その時はそれが一番だと思ってされた事だと思います。

明治三十四年の明水寺の祠堂帳の表紙裏に、明水寺の初代住職が書いたと思われる言葉が見つかりました。「先立ちし子は親のため知識なり　菩提の道に入らしめんがための」と一筆書いてありました。おそらく、子どもを亡くされた方がおられたのでしょう。子どもが先に亡くなられた。でもその子どもは善知識なのだという事です。親のためですからね。親に菩提の道を歩ませるための善知識だというのです。私たちへのメッセージですよね。

私達は縁次第で何をしでかすか分からない身です。そういう身でありながら、自分にはそんなことするはずがないと勝手に思い込んで、罪を侵してしまった人を切っているのが私達ですね。

枉れるを直さん

最初に三帰依文を唱和しました。仏法僧とは、本当に私達の依り処として大切な事だとお話しました。

和国の教主聖徳皇・聖徳太子は、仏教を中心とした国造りを目指され、十七条憲法を制定されました。憲法で示された第二条の内容は「二つに曰わく、篤く三宝を敬え。三宝とは仏・法・僧なり。」三宝とは仏法僧のことで、篤く敬いなさいと憲法に書かれています。仏教でこの国を治めようとされたのです。

この教えは何処の国の人であろうと、どの時代の人であろうと、どんな人も尊い存在であるという内容です。人間は教えに出遇うと教えに従うのです。「其れ三宝に帰りまつらずは、何をもってか枉れるを直さん。」人間は間違えるし、枉るのです。何故ならば自分の都合で物事を見るからです。だからこそ、教えに照らされることが必要なのです。そして、その教えすらも自分にとって都合のいいように聞くのが人間なのです。聞いた者同士が語り合い確認する必要があるのです。仏法僧の僧伽ですね。蓮如上人は「寄り合い談合せよ」と言われました。それによって、自分が枉っている。自分が色眼鏡で都合のいいように物事を見ていることに気付かされるのです。

本当に大切な事

テレビでこんな事を話されたお母さんがおられました。

「自分の子どもが生まれた後、ダウン症を発症しました。正直、目の前が真っ暗になりました。この先どうなるのだろうか。この子よりも私が先に逝くのでしょう。私がいなくなってしまったら、この子はどうなるのだろうか。本当に目の前が真っ暗になりました。でも、この子を育てる中で気づいたことは、時間はかかるかも知れないがこの子は何でもできる。みんなとこの子は同じだ。この子は私の宝物です。この子に出会えて本当に良かったです」と。

罪福信の考えならば切り捨てていくのでしょうが、そのお母さんは抱えたのです。その中に幸せを見出しておられるのです。仏様の眼をいただかれたのです。照らされて見えてくる世界があるのです。

仏様の光というのは、私達を包み隠さず照らし出すのです。私達が見ないようにしたり、後ろに隠したものを照らし出すのです。仏様に照らされて本当に大切な事に気付かせていただくのです。

お釈迦様、七高僧、親鸞聖人、蓮如上人が丁寧に教えてくださった事を、名も無き多くの方々が大事な事だと受け止めてくださった。その事が今、私達の下にこうして届けられています。次の世代へと伝えて下さったらと思っています。

平成29年10月15日
赤羽別院・報恩講
鈴木聡師法話要旨

■講師プロフィール
鈴木　聡（すずき さとし）
1965（昭和40）年
愛知県生まれ
同朋大学　社会福祉学部
　　社会福祉学科卒
同朋大学　別科卒
安城市　明水寺住職

別院行事のご案内

花まつり（はなまつり）
3月31日（土）午後1時～4時
一色町仏教会が主催する、スタンプラリー
本年のゴールは赤羽別院です。

帰敬式（ききょうしき）
4月11日（水）午前11時
本山鍵役によりお剃刀を受けます。

報徳会（ほうとくえ）
4月11日（水）午後1時
法　話　三重教区　浄圓寺　大賀光範師

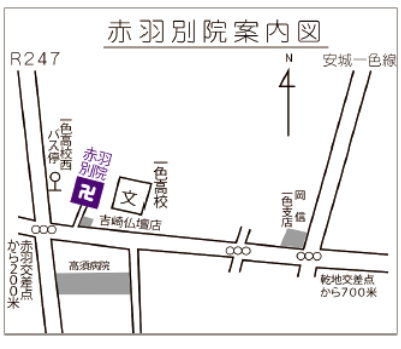
儀式部による学習会
5月31日（木）午後1時30分
講　師　第7組　本宗寺　堀田護師
「寺院葬について」

殉教記念法要（じゅんきょうきねんほうよう）
6月5日（火）午後1時
法　話　未　定
※午前11時30分 殉教記念碑前法要・葬町

夏の御文（げのおふみ）
7月15日（日）午後1時30分
法　話　第13組　慶徳寺　法輪篤師

晨朝法話（じんじょうほうわ）（午前七時）
4月13日（金）第10組　瑞玄寺　荒川　照順師
4月28日（土）同　永覺寺　野々山隆音師
5月13日（日）第11組　恵琳寺　小栗　信　師
5月28日（月）同　本澄寺　椰野　明仁師
6月13日（水）第12組　玉照寺　小栗　貫次師
6月28日（木）同　浄徳寺　松平　昌三師

赤羽別院案内図



御坊さんのお正月

初鐘

平成29年大晦日の午後11時30分、赤羽別院において、新年の鐘つきが行われた。

小さな子供さんによる、はにかみながらの力強い第一打を皮切りに、大勢の方々が鐘楼に上がり、それぞれの思いで撞木を揺らし、境内には鐘の音が厳かに響き渡った。

また、お御堂の中では、ご本尊に手を合わせた参詣者達が、温かい甘酒をいただき、冷たくなった体を暖めながら談笑していた。

修正会

続けて午前0時30分より修正会が厳修され、新年を迎えて最初の勤行で、御和讃は「弥陀成仏のこのかたは」『御文』は一帖目第一通に戻してお勤めされた。

勤行につづくご輪番の年頭の挨拶では、年中行事等、ご理解とご協力、お力添えに対し感謝を述べられた。

法話では、毎年年頭にあれもこれもやりたいと思いつつ、そのまま過ごしてしまう。明けても暮れても登年を重ねても、まだ先は有ると大きな誤りをしがちであるが、私達は人としての命、一瞬で終わってしまう命、阿弥陀さんから頂いた命を忘れてしまいがちであるとお話された。

さらに、親鸞聖人の遺言として伝えられている「一人居て喜ばは二人と思うべし、二人居て喜ばは三人と思うべし、その一人は親鸞なり」というお言葉を紹介され、悩みや苦しみがある中で、いつでも如来のひかりに照らされながら、お念仏申していくのだということを述べられた。

別院の境内に春を開く 御坊さんの花たち

毎年この時節になると「梅開早春」という言葉を思い出します。

これは「梅の花が早春を開く」という意味だそうですが、初めてこの言葉を教えていただいた時「梅の花が早春に開く」の間違いではないのかと思いました。しかし、考えてみますと、私たちは毎年梅や桜の花を見て、その花の上に春の訪れを感じています。春に呼ばれ花が開き、花の上に春が開いているということですね。

赤羽別院の境内でも、多種多様な春の花々が開き始めています。とりわけ庫裡の西や北側は、普段お御堂にお参りしていても、あまり目にしたことが無いという方も多いのではないでしょうか。そちらにも是非、足を運んでみてください。

春季彼岸会・報徳会・真宗講座等、例年の春の法座が本年も赤羽別院にて勤まりますので、花を愛でるとともに、共に聴聞いたしましょう。

春に呼ばれ花が開き、花の上に春が開くように、私たちも、わたしのもとに届いている南無阿弥陀仏の呼び声に応え、お念仏の花を開きましょう。

（写真は三月上旬のもの）

法義相続・別院護持 双全講を厳修

記録的な寒さが数日ぶりに和らいだ1月15日、赤羽別院の双全講は、昨日までの寒さに縮んでいた背筋がすっと伸びるような、とても荘厳なお勤めでした。

双全講とは、法義相続と、別院護持の二つを全うするために、古くから勤められている法要です。

お詣りされた女性に声をかけますと、「地区の講員の方々のお志も預かって来ているんですよ。」と話された。正に、地元の方々のお取り持ちによって護持されていると、有り難く思いました。

法話は、碧南市の専興寺坊守、浅野眞理子師に頂いた。本当の幸せとは何か。欲しい物を手に入れることや、成功することを幸せと、勘違いしてはいないか。お釈迦さまの最後のお言葉「自灯明・法灯明（自らを灯とし、法を灯とせよ）のように、仏の教えをよくよくいただいて、確かなものを頼りとして、私はこのままでいいと信じて生きたいものだと、話された。

私の本当の幸せは何かと自身に問われる法座となった。

浅野師の法話

三河の真宗史に学ぶ　赤羽ブロック坊守学習会

立春寒波の中の2月8日、赤羽ブロック坊守会主催の学習会（テーマ「三河の真宗史」）が赤羽別院にて開かれた。

講師には岡崎教区第7組浄専寺若院であり、同朋大学教授の安藤弥師をお迎えした。

参加者は崇敬区域のお寺のおよそ半分近く、40名程であった。

坊守方は、常にはお寺で内の力として寺院の管理・維持等に尽力されており、お寺に居ながら教学等を学ぶ機会が少なく、この様な機会には多くの方が参加され、学習意欲の高さを窺わせるものがあった。

安藤師は、はじめに真宗の歴史を学ぶということは、失われずに積み重なってきて、今がある。その歴史の上に私たちは立たせて戴いているということを話された。

三河における初期真宗門流の歴史的展開ということであるが、三河という地は、関東から京都へ、また京都から関東への通り道であり、必然的に親鸞聖人のお弟子方が逗留することにより、道場が出来ていったのだと述べられた。

そして、東本願寺創立の教如上人は、信長・秀吉・家康とわたりあう中、教化と浄土真宗に生きる姿を示され、この三河の多くの寺々と結びついたという歴史を教えていただいた。

真剣に聴聞

師のお話を聞くまで、断片的にしかとらえていなかった三河地方の教化の流れが理解でき、かつて先達が継いでこられた三河の真宗史を、私たちも大切にしていかねばならないと感じさせられる学習会であった。

崇敬区外からも参加者多数 装束作法研鑽会

本年2月12日、赤羽別院にて、儀式部主催の装束作法研鑽会が開催されました。

前回に引き続き、第8組宿縁寺の織田顕慶師を講師にお招きして、七条袈裟の着付けを中心に、共に研鑽して頂きました。崇敬区内の僧侶はもちろん、案内のチラシを見て、静岡県より数名の方々が参加されました。

住職や坊守さん方は、講師の手さばきを拝見しながら力メラやビデオ等で撮影したり、真剣そのものでありました。

講師が着付けた七条袈裟は本当に美しく仕上がり、装束もお荘厳である事を改めて確認できました。

また、織田師のお手本を拝見した後は、参加者同士お互い着付けをしてみることになったのですが、なかなか上手くいかず経験を積んでいかねばならないということを改めて感じさせられました。

参加した住職のひとりは「三十年間知らなかった事、間違っていた事を知る事ができて本当にためになった」と言われ、また坊守さんは「七條袈裟を着ける事は生涯ないかもしれないが、知りたい学びたい思いで参加した。是非、次回も参加したい」と感想を述べられました。

当初2時間のご案内でしたが時間を大幅に延長して、内容の濃い研修でありました。

共に研鑽

基地問題の現実に向き合う 「標的の島 風かたか」上映会

本年1月17日、岡崎教務所において、ドキュメンタリー映画『標的の島風かたか』の上映会、並びに本作品の監督・三上智恵氏の講演会が開かれた。

この上映会は、岡崎教区教化委員会の同朋社会推進部が主催しており、靖国問題学習の一環として、継続して企画されている。

作品名の「風かたか」とは風よけ・防波堤という意味で、三上監督はこのタイトルには3つの意味があるという。

ひとつは、平成28年の夏、米軍属女性暴行殺人事件の被害者を追悼する県民大会で、当時の名護市長が言った「我々は、またひとつの命を守る風よけ『風かたか』になれなかった」という言葉から、未来の子ども達を守る風よけになろうとする者の想いを表している。

二つ目は、自衛隊のミサイル部隊を各島に配備し、日本が沖縄を防波堤として、安心を得ようとしているということ。

三つ目は、それが米国の極東戦略であり、日本が中国の拡大を防ぐ防波堤とされているという意味で、標的の島とは、沖縄のことではなく、日本列島のことなのだと伝えている。

映画では、テレビや新聞等では目にできない、基地問題の生々しい現実が映し出されており、目に涙をうかべながら視聴する方もいた。

会場には教区内外・県内外問わず、多くの方が訪れていた。

参加者一人ひとりが、民主主義とは何なのか、平和とはどういうことなのか、今の自分は何をするべきなのか、様々なことを考えさせられる場となった。

第12組 親鸞の名告りに学ぶ 篤信寺報恩講

2月17・18日、熱池町の篤信寺において報恩講がお勤めされ、近隣寺院の住職方や多くのご門徒さんのお参りにより賑々しい二日間となりました。

本堂内には『御俗姓』についての掲示物があり「真の念仏者になるのでなければ祖師の御恩に報いることにならない」と記されていました。

『御俗姓』を丁寧に拝読されるご住職の姿からは、親鸞聖人の生涯を通して自分自身の生き方を考え続ける人が生まれてほしいという熱い思いが伝わってきます。

法話では、愚禿釋親鸞の名告りの愚禿の意味が語られました。「愚禿が信は、内は愚にして外は賢なり」内実は教えを依りどころにして生きているわけではなく、腹の中はドロドロです。そのまま「これが私です」とさらけ出さないで、表面だけはちゃんと立派なことをやっているという生き方をしているのが私たちの姿ではないかと述べられました。

この時の「賢」は見せかけの賢さで、それが私たちの現実の生き方ではないでしょうか。だから私たちは仏陀に導かれるということが、どうしても必要なのだと語られました。

報恩講の最後は、坊守と門徒さん手作りの美味しいおしるこが振る舞われ、みんなの語らいの場となりました。

人間が生きるということを真面目に考え、楽しく集まれる報恩講となりました。

語らう参詣者達

第9組 良興寺報恩講 お念仏と歌声が響く

本年2月23日～25日、第9組良興寺にて三日間の報恩講が厳修されました。

良興寺では、14年前から報恩講の次第に音楽法要を加えており、毎月練習会が開かれるだけでなく、報恩講前には特別練習の時間も設けられています。

当日、堂内では、朝から子ども達が元気いっぱいの声で歌唱練習をしており、キーボードやフルートの演奏と共に堂内の空気を震わせていました。

午前10時になると「開式の言葉」のアナウンスが流れ、導師入堂、一同合掌です。

最初は、譜面を見ながら「真宗宗歌」を唱和し、その後は「三帰依」「みほとけは」を唱和しました。

続けて、勤行本を手に『正信偈』をお勤めし、その後は子ども達による「夢をかなえてドラえもん」「うれしいひな祭り」「涙そうそう」「花は咲く」「なんまんだぶつの子守歌」「ふるさと」等の楽曲が披露され、堂内には可愛らしくも凛々しい歌声が響き渡りました。

最後は「恩徳讃Ⅲ」を唱和して、大人も子どもも一緒に南無阿弥陀仏を斉唱し、閉式となりました。

歌声が響く

門徒会住職合同 第14組 一泊研修旅行実施

本年2月5・6日、第14組では、三年の任期の最後に行われる門徒会と住職の合同研修旅行が実施された。

行き先は京都の本山、大谷祖廟、大津別院で、旅程の最初の行事はバスの中でのお朝勤。バスが高速道路に乗り、走行が安定したのを見図り組長の調声に合わせ、全員大きな声で正信偈を唱和した。

本来なら本山の同朋会館に宿泊し座談を行う所だが、現在、改修工事により宿泊できないため、諸殿拝観に贅沢な時間を使い、普段は目にすることのない所まで見学研修を行った。

両堂をお参りした後、工事中の同朋会館と和敬堂を見学し、次回訪れるときの期待を胸にした。

その後、宗務所に移動し、宗議会と参議会の開催される議場を見学。議員席にも実際に座らせて頂き、議会の雰囲気を味わった。

他にも、しんらん交流館、大谷祖廟を見学し、祖廟では特別にお車裏も見学できた。

翌日は大津別院の、重要文化財に指定されている御堂奥の諸殿拝観も行った。

今回は新企画として、帰りのバスの中で門徒感話と法話の会を開催。二名の門徒と若院による改悔批判のような展開となり、研修会らしい企画のなか、無事に帰路を進む有意義な研修となった。

議場見学

第8組 寺福正 境内でバザー開催 春季彼岸会厳修

本年3月10日、第8組福正寺にて、一足早く春彼岸会・祠堂法要が厳修された。

最初に、読経と正信偈のお勤めがあり、堂内には参詣者達の声が響き渡った。

お勤めの後、福正寺の彼岸会では恒例となった、元バーテンの僧侶で高田派の西川舜優師が面白可笑しく法話をされた。

また、境内では視覚障がいのある方を対象に、就労継続支援事業をしている岡崎市の「愛ポート」が、製作販売している生活雑貨や、協賛企業から仕入れた普段安くならない巷の人気商品を目玉価格で販売された。

同団体では現在も活動協力いただける企業や団体を募集中との事である。

さらに本堂では、蓮如上人の六字名号と、幼児名号や他の軸も掛けられて、参詣者の目を楽しませていた。

古より、お彼岸には浄土の門が開くと言われており、日々の生活に追われ、いつの間にか忘れている大切なモノ、遇えている今を見つめ直す、そんな時間を確かめさせられるような彼岸会法要となった。

盛況なバザー

儀式伝道について考える 法話実践学習会

第14組では、組の教化委員会が4部門に分かれて教化活動を行っている。

その中の、寺に住む人の学習を企画する、住職・寺族教化部門が企画した「法話実践学習会」第1回目が、本年2月13日に専興寺で開催された。

この学習会は、組の教化テーマ「仏法聴聞―聞法の場に座りましょう―」に基づいた、部門の教化事業方針「真宗の葬儀、ならびに儀式伝道について考える―実践を通して―」に則り、向後2ヵ年かけて組内各住職の法話実践の場として行われる。

初回は、各寺住職、組門徒会員やご門徒が座る中、住職4名が「通夜法話」の場を想定し、自身が実際に行っている法話を披露した。

一人5分程、どの様な方の通夜なのかを想定した法話の後、聴聞した住職やご門徒が感想を出し合った。

それぞれの立場で、通夜の場の現状がどの様なかたちになっているのか、また通夜の場で、どの様な法話が望ましいのか、意見交換を行い、有意義な学習となった。

次回以降は、「初七日」「年忌」での実践法話が予定されている。

法話実践の様子

人生の新たなスタート 帰敬式を受式しませんか！

帰敬式とは、仏様の教えに自らの人生を問いたずね、仏法を依りどころとして生きる者となることを誓う、人生の方向転換の儀式です。

受式者には「釋」の字を冠した二字の法名が授与されます。法名はお釈迦様の弟子（仏弟子）としての名告りです。亡くなってからいただけばよいという印象がありますが、生きている今いただくことに本来的な意味があります。

帰敬式は「おかみそり」とも呼ばれ、ご本尊の前でおかみそり（剃刀）が三度、頭にあてられます。別院では、本年も本山鍵役の剃刀により帰敬式を執行します。

あなたも受式しませんか。

◆帰敬の集い
平成30年3月29日（木）

◆帰敬式
平成30年4月11日（水）

◆場　所
赤羽別院 お御堂

◆奠加金　二万円
詳細は、赤羽別院またはお手次寺院にお問合わせ下さい。

株式会社 堀田組
愛知県西尾市吉良町富田八石11番地
電　話〈０５６３〉３５－００５９
ＦＡＸ〈０５６３〉３５－２５４５

和ごころはりきゅう院
はり　きゅう　温熱療法　往診有り　保険適応

	日	月	火	水	木	金	土
13:00～17:00	×	○	○	○	×	○	×

TEL 0563-77-3913
西尾市西幡豆中村郷1-2
介護を受けられている方、生活保護を受けられている方、往診が必要な方等お気軽にお問い合わせ下さい

集いの場　其の一

本号より新シリーズ「集いの場」と題して、赤羽別院崇敬区内で開かれている、各寺院の聞法会や同朋の会の様子をお伝えしていきたいと思います。

今回は、第13組・一色町酒手島の良宣寺にて、毎月第三日曜日に行われている「正信偈の会」を取材させていただきました。

午後7時30分より開催される会に備えて、7時頃にお伺いすると、ちょうど住職がストーブの準備をされており、15分もすると参加者の方々が本堂内に集い、始まるまでの時間は、冗談や近況の話が会場を和ませていました。

定刻になると坊守のオルガンに合わせて真宗宗歌が流れ、和やかな雰囲気の中にも緊張感が張り、参加者全員で斉唱。

次に住職導師のもと、正信偈同朋奉讃式、和讃は阿弥陀経和讃でした。

お勤めの後に続けて、三帰依文の唱和、そして住職のご挨拶があり、この時にお内陣の中を改めて紹介し、2月17日に御厨子を碧南市の寺院より頂いた事を報告し、参加者の中から「気付かなかった」という声も聞こえて、一同が笑顔で御厨子の頂けた事を喜んでいました。

挨拶の後には同朋新聞の1月号を活用しての勉強会が始まりました。

二河白道の朗読から始まり、各々が感じたことや疑問に思ったことを話し合います。

この日は漢字の話に触れ、「佛」と云う字の成り立ち、そして漢字の始まりといわれる蒼頡（漢字を創作したとされる古代中国の伝説上の人物）の話まで内容は広がっていき、住職の知識の深さに一同が聞き入る場面も見られました。

毎月様々なかたちで学びを深めているそうですが、一月には、会の仲間達で新年会を楽しむそうです。

新年会の際には、婦人会のメンバーも一緒に参加して、一年間の行事予定などを話しながら、自分達の畑で採れた野菜等を持ち寄って、鍋料理にして頂くので、殆ど材料費がかからなく、とても楽しめる会と聞かされました。

この良宣寺の「正信偈の会」は平成13年5月より約17年に亘り行われている学習会です。

始まりは、先代住職の知成氏が60年以上も前に始めた子ども会にまでさかのぼります。

知成氏は子ども会活動では有名な方で、お手伝い先のお寺では近所の子供が学校ではなくお寺に集まってしまう程の活動をされていたそうです。

自坊でも同様に子ども会の活動に尽力され、そこでお寺に縁を頂いた当時の腕白坊主だった方々が、今では寺院活動の中心となり、多岐にわたり活躍していただいているそうです。

午後9時に勉強会が終わり、親睦会が始まるところで私は失礼させていただきましたが、いつまでも居たくなるような、温かく穏やかな会でした。

人形劇団員募集
岡崎教区児童教化連盟

児童教化連盟（児連）は、岡崎教区の外郭団体として、教区内寺院の子ども会のサポート活動をしています。

中心的な活動として、お寺の子ども会を年間30ヶ所ほど巡回して、子どもとゲームをしたり人形劇や紙芝居を上演したり、仏さまのお話をします。

また、児連報恩講や花まつり、児童教化の研修会など、様々な活動を通して若手の交流と学びの場としても重要な役割を果たしてきました。

今後も活動を充実させていきたいと考えており

ます。お寺で子ども会をこれから開きたい方、いつかは子ども会を開きたいという方、児童教化に興味ある方、一緒に教えを聴いていきたい方など募集しています。

【連絡先】
真宗大谷派岡崎教務所
TEL0564(22)2136（岡田）

蓮如上人三河教化550年
應仁寺と三河の蓮如上人展

前号で紹介した「應仁寺と三河の蓮如上人展」が、1月23日より3月4日まで、碧南市藤井達吉現代美術館で開催されました。

蓮如上人が、三河を訪れ、教えを広められて、550年になる今年、この地方に伝わる沢山の法宝物や資料が展示され、期間中は一般の見学だけでなく、説明会や多くの団体研修なども行われ、岡崎教区坊守会では2月21日に蓮成寺住職の青木馨先生の説明をいただきながら一日研修をしました。

展示された宝物の中で目をひいたのは、門徒宅の仏壇に掛けられ、煙と煤で真っ黒になった小さな2幅の御名号でした。又、油ケ淵より化生したと言われる門弟・如光も蓮如と共に、真宗の教えを広める大きな役割を果したとわかりました。

午後は、青木先生にまとめの講義を頂き、様々な資料から、当時の人々の広域的な動きが、教えを広めるのに繋がったと話されました。

展示された法宝物の保存状態の良さと、展示し切れない程の数の多さに、蓮如上人と三河地方の結びつきの強さを感じさせられました。

藤井達吉現代美術館

「おぶくさん」ってなに？

仏供とは、仏器に盛り仏に供える米飯を言います。

家庭では、おぶくさんと、親しみをもって呼ばれ、毎朝お勤めの後にお内仏にお供えします。ご先祖様がお腹をすかしているからというのではなく、ご本尊へのお供えです。

さじなどできれいな丸形に整えることもありますが、盛槽で円柱形に盛り、蓮の実の形にするのが好ましいです。

他宗では、何種類かの野菜等を添えることもありますが、真宗では、米飯のみをお供えします。それは、真宗の教えが、清素を貴ぶからです。飾ることなく根本を大切にする教えによるものです。

寺院などでは、お仏飯とも言います。その昔、修行僧が、盛切り一膳の飯で全てを済ませた食事がもとになります。

子供さんがいらっしゃる家庭では、是非一緒にお供えし、手を合わせる習慣を教えてください。

盛　槽

ご逝去の報

◆山背　隆　師

第11組・善福寺前住職
平成30年3月7日御命終
享年　87歳

謹んでお悔やみ申し上げます

合　掌

情報募集

赤羽御坊新聞は、赤羽崇敬区内の仏事・行事の報告や、お知らせの記事が主となっていますが、各組より選出されたスタッフのみで崇敬区内の全行事を把握することは困難であり、情報の収集に苦慮しているところであります。「こんな行事を開催しているので取材に来てほしい」等、情報をお寄せください。

※連絡先は1頁に記載

第16回 御坊俳壇・川柳

選者　三浦　貞葉氏他

俳　句（順不同）

三味の音　お寺にライブに　夕時雨
菩提樹の　芽吹き仏心　湧くごとし
梅満白　手水の柄杓　整ひて
長生きは　幸せなのか　石蕗の花
黄水仙　たっぷり供へ　父母の墓
初電車　右も左も　スマホの娘
墓の供華　氷の咬みて　替えられず
名刹の　寺百畳の　隙間風
寺の鳩　節分豆に　急降下
春立つや　堂塔の影　松の影

川　柳（順不同）

仏との　会話補聴器　なしで聞き
申告は　資料保存と　国税庁
チョコ買ひて又チョコ買ひてバレンタイン
お知らせ　定例の第17回御坊俳壇・川柳の締切は5月5日です。奮ってご応募下さい

力富　敬子
野々山良子
近藤　芳正
原田　熙恵
加藤　久子
濱嶋　君江
信川　芳枝
斉藤　浩美
辻　宝樹
蓮沼たけし
佐藤　哲也
小林　千里
大溪　美恵

編集室

近年「終活」・「断捨離」という言葉を目にする。マスコミが取り上げ、新聞雑誌等でも特集が組まれている。

ある雑誌には「終活とは老後を迎え、いつ死が訪れてもいいように、自分の身辺を整理し、必要最小限の物資で暮らす。そのためにも、エンディングノートに思いを綴り、断捨離をして家族や友人、知人らにも迷惑をかけず、自分で後始末をして、ひっそりと消えていくことが理想である」と書かれている。

そんなことが可能なのか。疑問である。そういえば、同様の会話を時折耳にする。「若い者に迷惑かけんように逝かんとね」

本願念仏の教えに生きた先達は、如来の心を「えらばず・きらわず・みすてず」と端的に表し、求道の精神を「あせらず・あわてず・あきらめず」と教示して下さった。まさに「摂取不捨」である。

人は業縁存在であり、良くも悪くもそのなかに身を置いている。むしろ、互いに迷惑をかけ続け、命終するのが人間ではなかろうか。

お寺の掲示板

難しい今の世の中を
生き抜く智慧が
いっぱいの法話講
第九組・祐正寺

赤羽御坊新聞懇志

第10組　厳西寺同朋の会　様

物品寄贈

第10組　願正寺　様
火消壺　一点

貴重なご懇志を
ありがとうございました。